

第9回連合父母会文学賞

阿久悠作詞賞受賞作品について（飯田久彦）

（全体講評）

2017年は阿久さんの没後10年、生誕80年、そして作詞家デビューから50年目という節目の年で、CD、放送、出版、コンサートなど、阿久悠にまつわる様々な企画に触れることができました。

中でも異彩を放っていたと感じたのが、9月にNHKのEテレで放送された『水野良樹の阿久悠をめぐる対話』という番組でした。これは、現在活動を休止している〈いきものがかり〉の水野良樹さんが阿久さんとゆかりある人たちと対話を積み重ねていき、作詞家阿久悠の人物像を浮き上がらせていく内容です。さらに、阿久さんが遺した『愛せよ』という未発表の詞に水野さんが曲をつけ、NMB48の山本彩^{さやか}さんが歌うという構成で、非常に骨太で深みのあるテレビ番組でした。その最後に、水野さんの次のようなコメントが画面に字幕で流れます。

**ぼくが阿久悠さんから受け取ったこと
自分の〈言葉〉を他者に向けて投げつづけていく
という覚悟と勇気**

今回の阿久悠作詞賞には、計87篇の応募がありました。応募したお一人お一人の〈覚悟と勇気〉を推し測りながら原稿を拝見しました。

今回の応募作の半分以上は恋人との別れと失意を描いたものでした。たしかに、失恋は万葉集の昔から歌の重要な

テーマです。しかし、失意を書きつらねるだけではただの愚痴になってしまいます。失意の周辺にある思いがけない風景、あるいは失意の先にほのかに見える希望——そういったものを表現できれば、詞に個性が生まれます。真の個性を発揮する、つまり他人には書けない詞を書くためには、文才だけではなくそれなりの〈覚悟と勇気〉が必要になってきます。

では、阿久悠はどんな風景に眼をやりながら〈別れ〉を描いていたのだろう——水野良樹さんと同じように、作者の〈覚悟と勇気〉に思いを馳せながら、阿久さんが遺した詞を読み、聴いてみることを、今後この賞に応募する方にお奨めします。